



馬耳東風

名前は知っているが実際に見たことはないというのが誰にもある。私にとってハチドリはそのようなものの一つであった。10年程前、中米のある国で、木に咲いた花の周りを大きな虫が飛んでいるのを見た。見たことのない虫だったので何だろうと目をこらして見たがよくわからない。そこで手元のカメラの倍率を一杯上げて撮影しパソコンに移して見て驚いた。虫ではなく長いくちばしを持った小鳥だったのである。この時初めて私はハチドリを知ったのだが、そのあまりの小ささに驚いた。その後、ハチドリはその国の言葉で「コリブリ」という一般的な名称の他に、「バラの蜜を吸う鳥」とも言うことを教えられた。「バラの蜜を吸う鳥」とは何ともきれいな名前を付けたものだと思ったが、それだけこの小鳥に対して現地のひとは特別な思いを持っているのかも知れない。

その後このハチドリに関しては、次のような素晴らしい話があることを知った。

『森が燃えていました 森の生きものたちは われさきにと 逃げて いきました でもクリキンディという名の ハチドリだけは いったりきたり くちばしで水のしずくを一滴ずつ運んでは 火の上におとしていきま す 動物たちがそれを見て 「そんなことをして いったい何になるんだ」といって笑います クリキンディはこう答えました 「私は、私にできることをしているだけ』(ハチドリのひとしずく、監修・辻 信一、光文社)。

これは、エクアドルのアンデス高原に住む先住民(キチュア民族)の女性アルカマリが、文化人類学者にして環境運動家の辻氏に話した物語だそうである。キチュア

民族は、白人やメスティソ(白人と原住民の混血)達により、自分たちの母語であるキチュア語の使用さえ禁止されるという差別と抑圧に耐えながら生きていた。しかし、1980年代に彼らは暴力によらない決然とした抵抗を始め、ついに自治権を獲得したそうである。彼らはこのハチドリのように自分たちにできることをねばり強くやり続けることにより、差別と抑圧をはねのけることに成功したのである。そういう体験からであろうか、辻氏にクリキンディの話をしたアルカマリは、話のあとで次のように言ったという。「あまりに大きな問題にとりまかされている私たちは、ともすれば、無力感に押しつぶされそうになります。でもそんな時は、このハチドリのことを思い出してくださいね」と。

地雷除去活動支援やアメリカ同時多発テロ事件をきっかけに論考集「非戦」を発表した音楽家の坂本龍一氏は、環境や平和問題に関する社会活動も活発に行っており、長くニューヨークに住みながら日本の脱原発運動に深く関わっている。そんな彼は自らをクリキンディになぞらえているとのことである。

このところわが国には大きな問題が山積しており、考えれば考えるほど無力感にとらわれてしまう。被災住民の現状復帰がかなわないなかでの原発再稼働、沖縄の人たちだけに負担を押しつける普天間基地の辺野古移設、等々。私はこれまで、このような状況に対して悲憤慷慨しかして来なかった。しかしこのハチドリの話を知り、大いに反省させられた。残り少なくなった人生、「自分にできることは何か」といつも考えながら、できることをして行かなければ…と。さしあたりお釣りに500円玉を貰ったら貯めておいて、原発事故で放置された犬や猫の救援活動をしているボランティア団体に寄付している。(久)